



TITLE:

<Book Review>Wang Gungwu (ed.),
Malaysia, A Survey, New York •
London, Frederick A. Praeger,
1964,466p

AUTHOR(S):

口羽, 益生

CITATION:

口羽, 益生. <Book Review>Wang Gungwu (ed.), Malaysia, A Survey, New York • London,
Frederick A. Praeger, 1964,466p. 東南アジア研究 1965, 3(3): 203-203

ISSUE DATE:

1965-12

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/55095>

RIGHT:

Wang Gungwu (ed.): *Malaysia, A Survey*. New York · London, Frederick A. Praeger. 1964. 466 p.

本書は、マレーシア連邦が独立する際に、この新しい国が内蔵する諸問題を多角的に考察するという目的のもとに、マラヤ大学を中心とした26人の学者によって書かれた論文集である。

編者の Wang Gungwu 教授によれば、マレーシアという言葉には、19世紀より20世紀初頭まで頻繁に用いられたが、それは、当時、マレー半島よりインドネシア諸島東端のモルッカ諸島までの地域を含む範囲を示す言葉であった。しかし、英蘭両国の植民地支配行政が確立されるにおよび、マレーシアという言葉は、その本来の意味をほとんど失い、それが再び注目されはじめたのは、1961年に、Tunku Abdul Rahman 首相が、マラヤ連邦、シンガポール、北ボルネオを政治的に統一するマレーシア構想を打ちだしてからである。この「マレーシア」は、以前、その言葉によって示された範囲の一部しか含まないまったく新しい意味を所有した言葉であるため、この地域の多くの政治家達に、かなりの誤解と混乱をもたらしたのである。歴史的に見ても、マラヤ、シンガポール、北ボルネオは、英国の植民地であったという共通点を除けば、一つの政治的共同体として存在したことがない。その上、マレーシア連邦を形造るための歴史的、文化的土壌は、必ずしも十分に肥えてはいない。したがって、連邦設立当初に、内外から懸念された事柄は、この国が、人種、言語、宗教などをまったく異にした複数民族社会から派生する解決困難な諸問題をどのように解決するだろうかということであった。特に構成諸民族の利害と関連する政治体制と経済発展の力点の置き所、個別の民族の利害を越えた固有の民族主義の育成、国語の制定、統一された教育の方法などは、最も懸念された問題であるが、本書は、このような諸問題を自然環境、歴史、社会と文化、経済、政治の5つの角度から理解しようとしている。

この点、本書は、連邦設立直後に出版されるべく書かれているため、シンガポールが連邦より離脱した今日、連邦の将来に対する予想が、当時どのようなものであったかを知るうえにも、本書の内容は、興味深い。このような論文集に常に見られることであるが、執

筆者によって、視点が異なるため、一概にはいえないが、それでもなお本書には、意外に、連邦の将来に対する楽観論が支配的である。ボルネオの民族問題が重視されている (Tom Harrison) にしては、中国人問題では、その協調性の高い点が強調されたり (Victor Purcell) している。

全体として見れば、本書は、マレーシア連邦が直面する諸問題を理解するためには、好個の入門書であるといえるが、国内の諸地域の具体的情勢にかんする資料に乏しい。またマレーシアにかんする英語の書物に見られる共通点であるが、日本軍政の諸影響が極度に低く評価されている点は、マレーシアの現実を一層深く突込んで研究しようとする者には物足りない。

(口羽益生)

S. Husin Ali: *Social Stratification in Kampong Bagan, A Study of Class, Status, Conflict and Mobility in a Rural Malay Community*. (Monographs of the Malaysian Branch, Royal Asiatic Society, I) Malaysian Branch, Royal Asiatic Society, Singapore, 1964. x+170 p.

著者は、現在マラヤ大学の講師をつとめるマラヤ育ちの新進の研究者である。本書は、著者が1959年10月から60年1月にかけて、ジョホール州の村落においておこなった社会学的・人類学的調査の報告書であり、マレー人によってなされた数少ない実地調査のひとつとして、非常に貴重なものといえる。

調査地は、Batu Pahat と Muar とを結ぶ幹線道路の東側に位置し、ゴム栽培を主業とし、これに Coconut と Arecanut の栽培を加えた農業集落で、Kampong Bagan とよばれる。156のマレー人世帯と11の中国人世帯からなっているが、著者が調査したのは、この中149のマレー人世帯についてである。

著者は、まずはじめに、Kampong Bagan の人人の収入源を分析して、地主階級、中流階級 (教師・書記など)、農夫階級 (自作と小作に細分される)、労働者階級、失業者階級 (存在を指摘し、この村の成員が、経済的実力においてかなり異質的であることを示す。ついで、人格、教養、宗教上の地位、政治上の地位、職業、貧富などを判定基準として、村内において